

ミノは主として捕食によるものと考えられるが、捕食者は不明である。菅原らはニトベミノガに対する鳥類の捕食の重要性を強調しているが、本調査では実際に鳥が捕食するところは観察されなかった。

本種の越冬令期は不明であるが、若松・阿部は頭幅を測定し、平均1.2mmである事を明らかにした。筆者の測定値もほぼこれと同様の結果であるが、越冬期の後半に若干減少する傾向が認められた。

若松・阿部は本種の越冬場所が1～3年枝である事を明らかにしたが、本調査でも大部分は1年枝と2年枝に着生している事が認められた。しかし第2表によればAほ場とBほ場で1年枝への着生率にかなりの開きがみられる。これは既述のように、両ほ場で栽培管理が異つて

おり、Bほ場の樹勢が非常に劣っていて新梢の発育が悪いことに起因すると考えられる。

また1年枝へのミノの着生率は越冬に入ったミノの総数と1年枝の本数との関係によっても影響される。第2図に、調査した主枝2本当りの総着生数と1年枝の数との比（1年枝当り着生数）に対する1年枝への着生率の関係を樹ごとに示した。これによれば、1年枝当り着生数が多くなるほど1年枝への着生率は減少するという明瞭な傾向が認められた。この事は幼虫間の着生部位をめぐる競合関係の存在を示唆している。

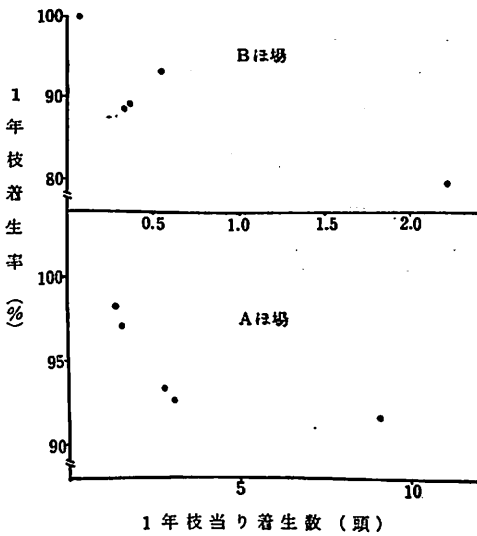
IV 摘 要

富山県福光町のカキ園において、チャミノガの越冬状況を調査し、以下の知見を得た。

1. 幼虫は越冬中に90%以上が死亡した。
2. 死亡幼虫の内訳は、越冬期の前半は、ミノ中に幼虫の死体が残存しているもの、後半はミノに破損がある空ミノが多かった。
3. 越冬令期は不明であるが、幼虫の頭幅は1.2mm前後であった。
4. 越冬場所は大部分1年枝と2年枝であった。
5. 1年枝へのミノの着生率はほ場により、また樹ごとのミノの着生量によって異った。

引用文献

- 1) 菅原寛夫, 他3名 (1963) リンゴ害虫ニトベミノガに関する研究. 園芸試験場報告 (盛岡) C, 1: 123～147.
- 2) 若松幸夫・阿部健二 (1972) 庄内地方におけるカキ (平核無) に加害するミノガ類の生態と防除について. 山形農林学会報 29: 20～27.



第2図 1年枝当り着生数と1年枝着生率

ブドウの害虫ツヤケンヒメゾウムシについて

常楽武男・成瀬博行 (富山県農業試験場)

ツヤケンヒメゾウムシ *Didotthis melancholica* Roelofs は、1930年に高橋によって、野生のエビヅルおよびブドウの新梢に産卵してそれを切断する害虫、クロヒメゾウムシとして記載されている。また、その後もたまたま加害事例が認められている (森本, 私信)。しかし、一般的にはほとんど知られていない害虫であるので、富山県下での発生事例をここに記録し参考と供する。

昭和48年5月24日、上市町片地および滑川市東福寺のブドウ園で、見なれないゾウムシによりブドウの新梢が切断されているという情報が、農改普及所を通じて農試へはいった。

さっそく現地へ急行して調査したところ、情報どおりゾウムシの成虫がブドウの新梢を加害していることを確認した。新梢ははち巻き状に食害されるため、その食害

部から切断する場合が多い(写真1)。

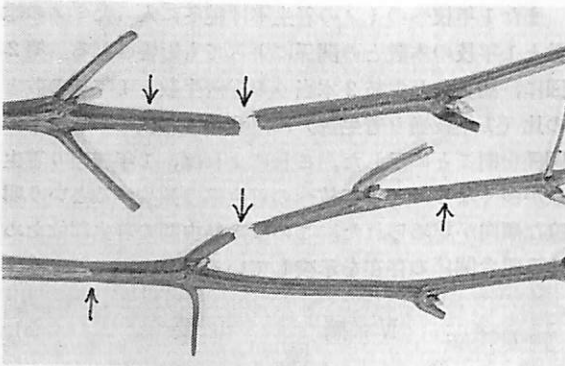


写真1 (→は加害部)

発生面積は両地区 合計約 5 ha, 両地区とも 山林に近接したブドウ団地である。現地農家の話では、前年も一部のブドウ園で同じ被害の発生がみられ、被害のはなはだしい部分では収穫皆無になったという。

このゾウムシは体長約 3.5mm, 黒色, 長だ円形, 鞘翅に縦点刻列を有する(写真2)。

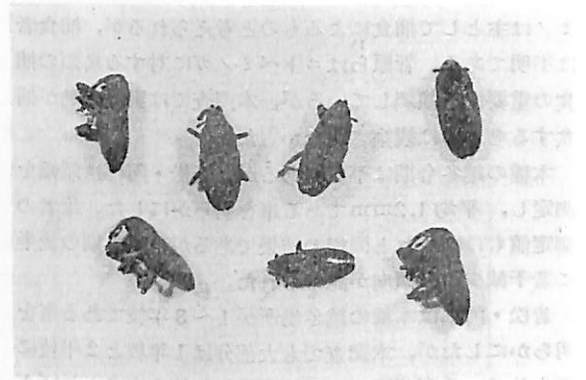


写真2

なお、本種名は農業技術研究所の長谷川仁技官を通じて、科学博物館の中根猛彦博士に同定いただいた。加害事例や文献については林業試験場九州支場の森本桂博士からご教示を得た。また、石川農試の石崎久次主査にも文献のお世話をいただいた。厚くお礼を申しあげる。

引用文献

- 1) 高橋 稔 (1930) 果樹害虫各論 (下巻), 764~766, 明文堂, 東京, 1225pp.

殺菌剤ダコニールのモモにおける残留*

町村 德行 (福井県農業試験場)

農業による病虫害の防除は作物の減損防止のみばかりでなく、栽培体系の変更をも可能とし、農業生産を安定させるのに役立っている。有機塩素系殺菌剤の TPN (ダコニール) は、特に園芸作物の病害に広い適用範囲をもち、モモには灰星病・黒星病の防除に登録されている。そこで安全使用の基礎資料とするため薬剤散布による果実および葉における残留濃度を調査し、2, 3の知見を得たのでその概要を報告する。

報告に先だち、本調査に際しては当场病理昆虫科長奈須田和彦博士より多くの指導を得た。ここに記して感謝の意を表する。

I 試験方法

試料 福井市寮町, 福井農試果樹科圃場において,

品種, 大久保を供試し, 1区1本2連制で, TPN75% 水和剤の散布を行なった。

果実における残留消長調査は, 7年生樹に肩掛け噴霧器で7日おきに, 1本あたり21散布したものについて行なった。また葉における調査は, 同場の切株から群生した1~2年生樹を供試したほかは, 果実の場合と同様に散布したものについて行なったが, 展着剤加用区 (展着剤リノール 0.3ml/1 l 加用) も設けた。

第1表 試料採集計画

試料	稀釈倍数	散布回数	試料採集日 (最終散布後経過日数)
果実	400倍	1,2,4	1, 3, 7, 10
	800倍	"	"
葉	400	1	1, 3, 7, 10, 20, 30, 40, 50
	400・展着剤加用	"	"

注) 最終散布日 8月4日

* 福井県農業試験場病理昆虫科業績No.35 (病)